

研修報告書「日本女性会議2009さかい」

島根県男女共同参画サポーター

小川 律子

10月30～11月1日「山の動く日きたる～ジェンダー平等の宇宙へ～」をテーマとするさかい大会に参加しました。

私の感情を揺さぶったのは大会2日目第10分科会『女性への複合差別 ～社会問題と気づくことから始めよう！～』のパネリストの一人、大阪府議会議員在任中の2005年8月同性愛者であることを公表し、日本で最初の同性愛者であることをカミングアウトした議員 尾辻かな子さん（文筆業）です。

話の中で気になる下記の言葉がありました。

『・世界がもし100人村だったら「90人が異性愛者で10人が同性愛者です」

・子どもたちは言葉によるいじめ被害（59.6%） 自殺を考えたことがある（64%）、自殺未遂の経験がある（15.1%）（ゲイ・バイセクシュアル男性の精神的健康に関する調査1999年白書） カミングアウトしている大人が少ないため「どうやって生きていけばいいのか？」という問題を抱えている。

・教育現場では、異性愛のことは教えても、同性愛のことはふれないことが多い。異性愛しかないという前提で話をされると、同性愛の子どもたちは深い疎外感を抱く。

（異性愛しかないという前提のもとで作られている社会を「強制異性愛社会」と呼びます。）

・「家庭環境が悪かったのではないか」「育て方が悪かったのではないか」の戸惑い「誰にも相談できない」「隠さなければ」と社会からの疎外感を持ち当事者を責めることにもなりかねない。…家族への支援 家族にも正しい知識と仲間が必要。

・もしもの時、海外では同性パートナーの諸権利を法的に保障する流れに向かっているが日本ではまだで、同居する際に住居を探すのも困難。パートナーが死亡の際、遺産や共有財産の相続権がない。病院での看護・面接や治療への同意ができないことがある。社会保障・税制等における不利益がある。民間でも、金融機関との取引や、生命保険の受取人指定が認められないことがある。同性愛者等を標的とした憎悪犯罪（ヘイトクライム）が発生しており、殺人事件も発生している。

・「女性とはいったい誰のこと」「誰を好きになるか…です」…と。

私は最近、女性を「しかたなく」数に入れた感の会議や頭から入れる気の無い会議がまだまだ一般的に行われている事を憂っていました。今回の分科会に参加して私の意識が驕っていたことに気づかされました。

正しい知識を得る努力をし、社会の問題と気づくことが本当に大切なことで一人でも多くの人に知ってほしいと思いました。

研修報告書「日本女性会議2009さかい」

島根県男女共同参画サポーター

神移 いつみ

10月30・31日の両日、山の動く日きたる～ジェンダー平等の宇宙へ～をテーマに、日本女性会議が堺市で開催され、男女共同参画サポーターとして参加しました。新幹線を降り偶然話しかけた人が、女性会議に参加される栃木の方たちで意欲的に活動されている話をお聞きし、今年度からサポーターになった新人としては“皆さんボランティアでどうしてこんなに熱くなれるのか”その訳も知りたく圧倒されながらも興味を持って会場入りしました。オープニング与謝野晶子の「山動く日きたる」が、太鼓に合わせて書道家の手で力強く書かれ、与謝野晶子はその時代の女性に影響を与えた一人でもあったのです。基調報告が終わり対談に入りました。男女雇用機会均等法に尽力された赤松良子さん・高齢社会に目を向け介護保険法に携われた樋口恵子さんとの本音の対談、赤松さんは均等法を仕上げるまでの苦勞を乗り越えられたのは“人の役に立ちたい”という思いしかなかったとの事、樋口さんは介護保険が通るまでの厚い壁の中で「女性力」の重要性を主張されました。最後に樋口さんが「また女性に生まれてきたい」とおっしゃり「赤松さんはどうなの？」と聞かれた時「私は残された人生を人の役に立つ事をして人生を全うしたい それだけ」とおっしゃった時会場から盛大な拍手がありました。赤松さんは自分の信じた道を淡々と歩まれ今後も変わる事はない強い信念に感動を受けました。2日目はサポーターとして高齢・介護の啓発活動をしていることもあり分科会は「高齢社会」を選びました。コーディネーターと3人のパネリストの方々の対談のなかで、きらくえん市川禮子さんは“園は地域の中にある居住である”地域の老人会にも参加し、300人のボランティアと共に一人一人が豊かに暮らせるように人として尊重し合う（入居者・家族・職員・地域）。またソーシャルワーカーの尹基さん「故郷の家」は在日韓国人の孤独死と日本人の母を通しての高齢化社会をみる。“壁をなくし日韓のかけ橋となる”心を打つものがありました。リハビリ屋と称す備酒伸彦さんは過剰なサービスは生きる意欲が停滞し寝たきり、麻痺も治らない。自分で動こうと思う動く事の環境を創る事が大切。相手がどんなサービスを求めているか、人権を尊重し決定は本人自身が持つようにする。コーディネーター春日キスヨさんは元気な時から自立の生き方を身につける事が大切。分科会で学んだ事を今取り組んでいる高齢社会・介護編のなかに活かしていきたいと思います。2日間の中で、皆さんが熱くなる訳が少し解ったような気がします。それは“無心で人の役に立ちたい”という事なのかもしれない。

研修報告書「日本女性会議2009さかい」

島根県男女共同参画サポーター

佐藤 貴美

「日本女性会議 2009 さかい」(10/30～11/1)に参加し「男女共同参画社会実現への現状と課題」(10/30)の全体会、第6分科会「女性の経済的自立の実現～のびのびと稼げる新しい働き方」、全体会「ワーク・ライフ・バランスはすてきな経済対策」(10/31)に出席しました。

私は、今年度初めて島根県男女共同参画サポーターを委託され「どんな役割を求められているのだろうか？何が出来るか？与えられたからには、役に立つことをしたい。」との想いと、現在仕事を持っている為、仕事の融通が利かない限り講習会には参加する事が出来ないが、この度は、都合よくチャンスが舞い込み「行かなくては！」と思い立ち大田市から堺市まで行き、希望通り全体会と分科会の受講も出来ました。選んだテーマは、自分自身の今までの経験と、現在の事情を比較したいと思い受講しました。

2日間で感じたことですが、「地域格差？時代が違う？私の経験を活かして、次に繋げていくには？」など疑問の中から私なりに整理してみれば、地域格差と時代＝都会と大田市の事情を見ても、生産労働人口の減少と企業の数（希望する職種が無い、働きたくても働く場所が無い）など、大きな違いがあり実例の報告等から今後大田市も女性が、結婚や出産で社会生活を諦めなくても良い大手企業が多く進出してくれば、大田市の経済の発展も有り、都会で暮らす女性の事情同様の悩みも出てくるのでは、と地方で暮らす一人として感じました。

私も、27年前ですが、結婚後も仕事をし、第1子出産で退職、第2子出産後社会復帰をした当時、出産で仕事を辞める事に疑問を持っていませんでした。育児と仕事の両立も当然の事として受け止め子供たちを社会に送り出してきました。しかし、全て自分一人してきたわけでもなく、夫や実母の協力、近所の方に助けて頂いたお陰で、安心して仕事も育児も出来たのだと思い感謝しています。昔も今も家庭や社会の中で男性、女性それぞれが補い合う事で助け合い、お互いに信頼と尊敬の気持ちを持つことで子供は育ち、親としても成長すると思います。この気持は、時代が変わっても変わってはいけないものだと思います。また、今の時代子供を取り巻く環境の悪さや、子育ての出来ない親がいるという現実を根本的に見直していくことが一番必要ではないかと考えます。

女性が、社会生活をしながら自分らしく生きていくことは、大変困難だと思いますが、「女性が楽しく美しく生き生きとしていれば、経済も家庭も発展する！」が、私自身を前向きに支えてきたモットーなのですが、今回の、パネラー講師の方々を見ても私のモットーは、少なからずまちがいないと確信する事が出来るほど前を向いている人は、美しいと実感する事が出来ました。私自身のワーク・ライフ・バランスと、今回の、機会に触れたことも新たな価値として今後の男女共同参画サポーターとして活かしたいと思いました。